

シリーズ
第2弾

発見! 熊野町のエエところ。

今、各地で地元を見直す動きが強くなっています。各地にある名所や名物。もちろん熊野町にもたくさんあります。そんな町内に埋もれた、さまざまなモノ・場所などの「エエところ」を紹介して、発見、再確認していく新コーナーです。今回は「中溝地区」からのレポートです。

中溝ギャラリー「あたりえMEUDON」オープン!

「わあ、きれい!」

一歩入るなりそんな会話が聞こえてくる。

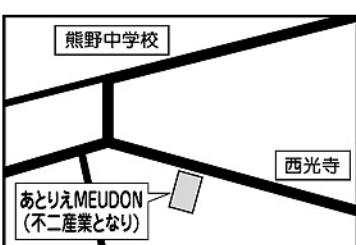


「（）」は、9／23の筆まつりに合わせてオープンした「あたりえMEUDON」。「ムードン」とは、絵画の下地材として使われる白い顔料のこと。「ギャラリーの壁が白い、何事においても下地が重要と考え、地域に根ざした芸術文化の下地をつくりた」と、筆の里工房美術研究員としてこの町に来られ、このギャラリーのオーナーでもある松村卓志先生（28才）は語る。

15畳程度のスペースを地域の方々とアイデアを出し合い、地元の大工さんも協力しながらすべて手作りで改装した。慣れない手作業で完成した白い壁と黒い梁が印象的なこのギャラリーには、松村先生のアリズム（写実主義）の油絵がとてもよく似合う。



市立大学教授野田弘志先生による題字



筆まつりが終わるまでも、中溝地区はまだまだ熱い。筆の里サポート会議やネオレトロワーキング委員会などが住民にて、何事においても下地が重要と考え、地域に根ざした芸術文化の下地をつくりた」と、筆の里工房美術研究員としてこの町に

「あたりえMEUDON」は毎週日曜日午後から開館。今後は、商店街のシャツターやのれんなどに使う絵画の指導を、子ども達に行うなど魅力的な活動が盛りだくさん。なお、彼岸花の球根は、当ギャラリーにて現在も受付中のこと。次の日曜日には球根片手にぜひ一度訪れてみてはいかがだろうか。

中心市街地活性化を目的として熊野町商工会が「熊野ネオ&レトロ」事業を始めたのが昨年。2年目の今年は、中溝通りと筆の里工房をうまくリンクさせ、かつアートを取り入れる計画だ。このギャラリーは、その情報発信源的な役割を持つ。

筆まつり当日のオープニングイベントでは、津軽三味線ライブが行われ、あいにくの雨にもかかわらず多くの人が、若者の演奏する珍しい音に足をとめていた。



（記者）議会広報委員 伊藤真由美